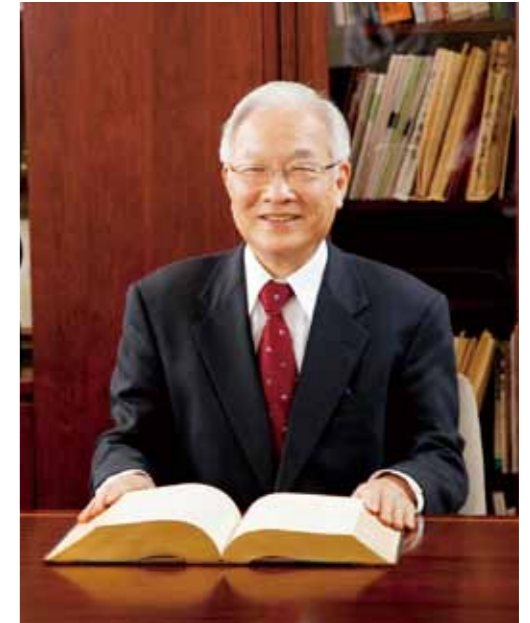


金沢大学創基 150 年史の刊行にあたって

金沢大学は伝統ある大学である。しかし、どのような伝統があるのかを知っている者は残念ながら今日そう多くはないであろう。歴史書や歴史年表に書かれた出来事は、書かれなかった多くの声と思いによって圍繞されている。むしろ、書かれざる多くの平凡なドラマの厚みが歴史的な事件と事件の間を埋め尽くしている、と言っても過言ではなからう。そして、歴史の流れの意味を定めるのは、大きな事件に劣らず小さな日常でもある。

この度、金沢大学が1862（文久2）年の加賀藩種痘所開設から数えて150年目を迎えるに当たり、150年史の編纂を思い立ったのは、歴史の流れの中に立つ本学の姿を大きな事件だけからでなく、小さなエピソードからも確認したかったからである。金沢城のキャンパスに咲いた桜も、巨大な最先端医療施設も、学生食堂のカレーの匂いも、雪道につけられた真新しい足跡も、すべてが金沢大学である。すべてが金沢大学に通った人々の記憶である。

150年の歴史を持つことはときに大変な重荷である。ましてや、150年先の未来を揺るぎなく持つことはそれに勝る重荷ともなるであろう。しかし、金沢大学とともにあることの誇りと希望は、その重荷に十分耐えるだけの勇気と力をわれわれに与えてくれるのである。



金沢大学長 中村信一

